世田谷村日記

石山修武

八月十四日　日曜日

昨夜、帰り着いた世田谷村で月下美人が一輪咲いた。ふくいくたる香りが部屋に一瞬流れた。今日はその香りは跡方もない。TVは今日も朝から小泉政権解散政局でにぎわっている。しかし、時局政局は終ってみれば跡方もないから。終戦記念日を明日にして、どうやら首相は記念日の靖国参拝だけは取り止めるようだ。

散る桜、残る桜も散る桜、特攻隊員が残した歌かどうかは知らぬ。最近のメディアで見掛けた鋭いフレーズの一つだ。小泉首相を戦国時代の武将信長に喩えたりの最近のメディアの論調は極めて浅薄極まる。首相もそれに乗って見せ、反乱軍に本能寺で討たれぬよう頑張ります、なんて言ってみせる。女刺客とか、くの一とか、選挙にも時代小説のエンターテイメントの風が吹き始めてしまった。

小泉首相の発言の歯切れの良さは、民主党党首の岡田氏の比ではない。一言、一言のセンテンスが非常に短い。しかもメール通信文体である。このメール口調というのは、全て、散る桜、残る桜も散る桜の如くの、短歌調の伝統を継承しているものやも知れない。短く言い切って、その短さで何かを修辞させよう、多くの意味を背負わせようとする。

小泉首相には大衆歌人の如き才質が、確実に在る。与謝野晶子に典型的な。政治家は芸能人、あるいは芸術家とは異なる種族であるという常識が私達にはあった。ところが現実の政治の世界には多くの芸能人が入り込む現実がすでに歴然としてあった。

小泉首相は、その現実を修辞してみせているのだろう。それが小泉劇場政局の実体である。その劇場は投票によって皆が、つまり国民が作ったのである。政治家となったプロレスラーが幼稚な思考で何を言おうが、車椅子の元タレントが何を言おうが、参院議長だって元女優なんだし、しかも、こんな状況は国民が作り出したものである。であるから、小泉首相が大衆劇場国家をメディアミックスで作り出している現実も又、投票によって作り出されている現実である。何をか、いわんやなのである。